校長室だより～燦燦～ №１５４

想定内

2020.7.14

新型コロナウイルス感染症による現状は、決して想定外の出来事ではない。人類の歴史を振り返れば、幾度となくウイルスとの闘いがあり、人類はその闘いを乗り越えることで今日まで生存してきた。

今回、なぜここまで世界に拡大し、多くの人命を奪っているのか。その要因はいくつかあると思うが、その一つに、新型コロナウイルスの致死率の低さに気を緩めてしまったことは考えられないだろうか。このウイルスは大変な感染力を持つ一方、致死率は世界全体で７％前後である。２００２年に中国で発生し世界に広がったＳＡＲＳの１０％、２０１２年にアラビア半島から世界に拡大したＭＥＲＳの３４％、２０１４年から数年にわたってアフリカで猛威を振るったエボラ出血熱の４０％に比べて低く、そのため油断し、結果的に感染拡大を招く一因となってしまったことは否めない。

もう一つは、ウイルスを伝染させる媒体が目に見えないことである。日本脳炎やデング熱であれば、ウイルスを媒介する蚊を警戒し退治することができるが、新型コロナウイルスの場合、感染の予兆がない。無症状の陽性患者も多く、誰も気づかない中でウイルスが蔓延してしまったのではなかろうか。

さらに、大きな視点で見れば、人類全体が長期的に見て油断してしまったとは言えないだろうか。１９世紀中頃には世界的にコレラとペストが大流行し、コレラで数百万人、ペストでは１千万人以上が亡くなったとされている。２０世紀になると、スペイン風邪が世界規模で流行し、推定五千万人、日本でも五十万人くらいの命を奪ったと言われる。さらにアジアではアジア風邪、香港風邪が大流行し、それぞれ二百万人、百万人が亡くなっている。

これらは、細菌やウイルスが世界中にパニックをもたらしたわけだが、それ以降５０年間ほどは沈静化していた。近年、ＳＡＲＳ、ＭＥＲＳ、エボラ出血熱が相次いで発生したが、いずれも致死率が高い割に感染者も死者も少数であり、世界的規模で見れば新型コロナウイルスは香港風邪以来の大災害となった。５０年前の大切な教訓や備えを忘れかけていた人類を、未知のウイルスが襲ったのである。言うなれば、今回のことは想定内のことなのである。

佐々淳行氏は『危機管理のノウハウ』の中で危機管理の３つの要点を挙げている。一番目は、疑わしいと思ったときは、まず行動する。二番目は、最悪の事態を想定して行動する。三番目は、失敗は許されるが、見逃すことは許されないということである。これら危機管理の原則に照らし合わせてみても、今回の初動の遅れは明らかである。

危機管理を論じる場合、日本の文化に目を向けることも必要である。なぜなら、牧畜社会と農耕社会では伝染病についての考え方が根本的に異なり、その違いが危機管理についても反映されているからである。

評論家であるイザヤ・ベンダサン氏は、著書『日本人とユダヤ人』の中で興味深いことを言っている。遊牧民族は、例えば群れの中に一頭でも口蹄疫などの伝染病のある羊がいたら、検疫などせずに群れの全頭を殺す。一方、日本人のような農耕民族は、稲が病気に感染してもその部分だけを刈り取って、あとは生かすという、ある種の対症療法で済まそうとするというのである。

欧米のようにロックダウン（都市封鎖）という強硬措置をとらずとも日本人は規則を守り、暴動など皆無である。今回の日本人の危機への対応を見ながら、良きにつけ悪しきにつけ、農耕社会の文化が、その魂にしっかり根づいていることを感じずにはいられない。